

慰霊の旅 絆が開いた

韓国人遺族、日本人支援で肉親の戦没地へ

太平洋戦争で最も悲惨な戦場の一つ、ニューギニア戦線で父や兄を亡くした韓国人2人が、この夏初めて戦地を訪れた。植民地下の朝鮮から徴用され、遺骨も戻らぬままの肉親の足跡を探す旅は、日韓の遺族交流をきっかけに実現した。

初めて島を訪れた韓国人の南英珠さん(78)と高仁衡さん(69)が1日夜、関西空港に戻った。旅を企画した関西の市民グループ「在韓軍人軍属裁判を支援する会」に迎えられ、追悼の儀式「祭祀」をおこなってきた思いなどを語った。

南さんは、旧日本軍人だった16歳年上の兄を東部ニューギニア(現パプアニューギニア)のヤカムルという

う地で亡くした。どんな最期だったかはわからない。「なぜこんな険しい場所で亡くなったのですか。天国で父と母に会って無念の思いを解いてください」。海辺のヤシの下でわずかな乾物を供えて祭祀をし、この兄に呼びかけたという。

8日間にわたる厳しい旅だった。パプアの国内線を乗り継いだ後、スコールで浸水していた陸路をあきら

め、船を調達。支えたのは、ここで40年以上、日本人戦没者の遺骨収集に携わる遺族、岩淵宣輝さん(71)。

5年前、同会が支援してきた靖国合祀取り消し訴訟の原告で、父を亡くした高さんと出会った。「お父さんのいる場所に行ってみてくださいか」。こう尋ねたのが今回の旅のきっかけに。1人45万円もする渡航費が



①ニューギニアを訪れ、喪服に身を包んで祭祀をする高仁衡さん(右)と、見守る南英珠さん(左) ②2007年、ニューギニアで遺骨の発掘をする岩淵宣輝さん(左) NPO法人「太平洋戦史館」提供

壁だったが、カンパを呼びかけて実現にこぎつけた。南さんと高さんのもとには戦後も肉親の消息が伝えられなかった。20年以上たつて自力で戦死記録を見つけて、靖国神社に無断で合祀されていることも知った。

遺骨さえ戻らないと恨みを抱いてきたが、岩淵さんの誘いで初めて戦没地を訪れてみようと思えたという。朝鮮半島や台湾出身者

を含む旧日本軍18万人以上が犠牲になったニューギニアには、今なお9万体系りが眠ったまま。岩淵さんは今後、2人の肉親の足取りにつながる野戦病院などの情報を集めるつもりという。

「あまりに胸の痛い旅だったが、私には苦勞ではなかった。岩淵さんとお会いして幸せです」。高さんはこう語った。

遺骨収集推進に期待

民間が主催した今回のツアーとは別に、日韓政府が費用負担し、韓国人遺族が

慰霊碑巡りになってしまふとの声も出ているという。

費用負担し、韓国人遺族が激戦地へ向かう枠組みもある。外務省によると、2006年度に始まり、年2回ほど各約20人が太平洋諸島などを訪れる。ただ、民間団体の調べで約4700人の朝鮮人が犠牲になったとされるニューギニアへの訪問は07年の1度だけ。遺族から見れば、希望地に行くのは狭き門となっている。

また、在韓軍人軍属裁判を支援する会によると、戦況を知る日本人の生還者が同行しないため、ただの

労働省によると、約24万人いた朝鮮出身の軍人・軍属のうち2万2205人が犠牲になった。戦後、韓国側に返還された遺骨は9259体。現在まで戻らない場合、千鳥ヶ淵戦没者墓苑(東京都千代田区)に眠るか、戦地に残ったままになる。同会の古川雅基事務局長(49)は「今回の遺族交流が有意義な追悼訪問や遺骨収集の推進に道をひらくきっかけになれば」と話す。(多知川節子)